

佳作

勇気ある一言

埼玉県 加須市立騎西小学校六年 寺嶋陽太

自分が困った時、クラスの誰かに声をかけるには少しばかり勇気がいる。声をかけそこなうこともしばしばだ。まして、周囲が全員見知らぬ他人ばかりだったら、自分からは絶対に声をかけられないな、と思う。

ぼくはよく電車に乗るが、席をゆずられたお年寄りが、座るのを断る場面を何度か見たことがある。そんな時、車内の空気はよそよそしくなり、そばにいるぼくも居心地の悪さを感じてしまう。そして、席をゆずって断られるくらいなら、いっそのこと知らんぷりしている方がましだな、と思うのだ。もちろん、よくないこととはわかっているけれど…。

こんなことがあった。ぼくがお父さんと温泉に行った時のことだ。その日は、さいたま新都心駅近くから出発するバスに乗ることになっていて、ぼくと

お父さんは乗り合わせ場所を探していた。普段は出かける時には電車か車を使うことが多いのに、この時は珍しくバスだった。だから、よけいに乗り合わせ場所に迷ったのだ。

「あと十五分で出発か…。本当にわかりにくいな…。」

お父さんは困ったようにつぶやきながら、さいたま新都心駅の付近をきよろきよろしていた。ぼくも困ったな、と思った。すると、その時だった。

「何かお困りですか。」

さわやかで優しい声が、僕たちの肩越しから聞こえてきた。若い女の人が声をかけてきたのだ。もちろん、全く見知らぬ人だ。温かなぬくもりが耳に残った。お父さんは素早く事情を伝えると、その女の方は丁寧にバス乗り場までの道を教えてくれた。ほっとした。そして、そのおかげで、ぼくたち二人は時間間に合い、楽しい旅行をすることができたのだ。あの時、ふいに後ろから声をかけられた時の驚きとうれしさを、ぼくは今でもはっきりと覚えている。そして、ぼくが女の人の立場だったら、絶対に知らない人に声はかけなかっただろうな、と思う。しかし、その女の人の一言があったからこそ、ぼくたち

はバスに乗れたのだ。

「見て見ぬふり」は、実はたくさんある。しかし、本当に困っている時に声をかけられた時のうれしさは、本当に困っていたその人にしかわからない。そうは言っても、自分が困っている時でさえ声を出しづらいのに、まして見知らぬ他人に声をかけるというのは、相当な勇気が必要だと思う。ぼくはあらためて、声をかけてくれた女の人のことをすごいな、と思った。そして、そのさりげなさの中に、「優しい強さ」を見た気がした。たった一言だったけれど、あの日、あの時の一場面が、今でも僕の心に強く焼き付いている。